

---

s Of The World Radiant Mythology -**剣戟のアリーヤ**-

久々津 勇魚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Tales Of The World Radiant Mythology - 剣戟のアリーヤ -

### 【Nコード】

N1414Z

### 【作者名】

久々津 勇魚

### 【あらすじ】

ルミナシアに起きた異世界の侵蝕から暫く――

別世界 ダイランティア から飛ばされてきたアリーヤ・タリズマンは、当然の流れでギルド「アドリビトム」へと身を置くようになる。

しかし、アリーヤはある秘密を抱えていた――

## ブログ（前書き）

特攻にも等しい今回の投降ですが、出来る事なら温かい目で見てもらえれば幸いです。

最近ではティルズの二次創作が多く、自分もよく観覧して勉強させていただきました。

この手の書き物は好きではないと言う方は、戻るをお勧めします。

## プロローグ

「世界樹」と、その「世界樹が生み出したとされる星晶ホスチアというエネルギー鉱物で

発展を続ける世界、ルミナシア。

しかし、星晶の力で産業が発展する国々がある一方で、それらの国から植民地化を強要されたり、

恵みを奪われる国もありました。

世界樹より生れし救世主デイセンドーと、空を駆ける船、バンエルティア号を拠点に活動するギルド、

「アドリビトム」の面々の活躍によって、世界に平和が訪れました。  
ですが、まだ戦いの火種は残っていたのです。

## プロローグ（後書き）

気付かれた方もいると思いますが、全部一から書きなおすことにしました。

大した文才も無く、オリジナルの世界観をつづるのは正直無理でした。

なので、原作に沿った設定のものにしたいと思います。

## 襲撃（前書き）

一から書き直すことにしました。やっぱりオリジナルの世界観は早かったです。

自己満足の作品でよければ、見てやってください。

## 襲撃

ロイド・アーヴィングとスパード・ベルフォルマは同じ二刀流の剣士である。手数ของ多さも魅力的だが、攻守のバランスにも優れた戦闘スタイルである。その代わり、満足に扱うには相応の体力と筋力が必要となってくるのだ。この二人はそれを見事に使いこなし、数々の修羅場を潜り抜けてきた。

現在二人が居るのは、生態系が徐々に回復しつつある コンフェイト大森林 の緑の中だ。神秘的な雰囲気を持ち壊すかのように、ロイドとスパードは疾走していた。彼らの視界に映るのは、素晴らしいまでの自然ではなく、依頼で提示された間引きの対象のそれだった。

「オラア！ 待ちやがれエ！」

種別に言つと魔獣系の魔物であるウルフは、何匹かの群れを成していた。実際なら恰好の獲物がいれば襲い掛かっているこの魔物は、現状だと「獲物」として追いかけているのだが。

そうさせているのはロイドの前を走るスパードである。アドリビトムでもガラの悪さが目立つ生粋の不良少年で、同じルームメイトのルカ・ミルダをイリア・アニーミとからかうのが日常となっているが、実際は義に厚い男らしい性格だ。

もう一人の双剣士、ロイド・アーヴィングとは同じ二刀流使いとなのでよく語り合ったりする。しかし大半はロイドのボケにスパードが突っ込んでいるだけなので、傍から見たら漫才にしか見えなくなってしまうのが本人としても悲しいところだ。

獣道を巧く通って追跡を逃れようとするウルフたちを、二人は全力で追いかける。

「おいロイド！ このままじゃ埒があかねえ！ 回り道して挟みこむぞ！」

「わかった、そっちは頼んだ！」

ロイドは木々の間をすり抜け、スパードとは別々に行動することになった。

森の中を慌ただしく駆け回り、両者ともに疲労の色が見え始める。

「もう面倒臭え！ ウィンドカッター！！」

悠々と聳える大木の根元を風の刃で切り刻み、ウルフたちの行く手を遮ったスパードは、「ヒヤヒヤヒヤ」と笑いながら、腰に携えた二本の剣の柄を握った。この時点で、先ほど指示を出したロイドの事はすっかり忘れている。

「どうしてくれようか？ ああん？」

？窮鼠猫を噛む？とはまさにこの事である。

行き場を失ったウルフたちは、無謀にもスパードに襲い掛かった。スパードは好戦的な笑みを浮かべて斬撃を加えていると、あっという間にウルフは片付いてしまった。

「てこずらせやがって……あれ？」

……ロイドが、いない？

ここでさっきのやり取りがスパイダの脳裏を過った。

『このままじゃ埒があかねえ！ 回り道して挟みこむぞ！』  
『わかった、そっちは頼んだ！』

……すっかり忘れてた。

そのことに気付いた時には既に遅かった。前方の道は自分で塞いでしまったのだから。

「や、やっちゃった……」

「あれ？ スパイダのやつ、何処行つたんだ？」

道が交わるまで走り続けたロイドは、拳句の果てにわけの分からない場所まで来てしまった。

黒い土の湿った匂いは故郷の村を連想させたが、感傷に浸っている余裕は今の彼には無い。

「ちつくしゅう、ここ何処だよ」

万が一に備えて持ってきておいた地図を両手に広げて位置を確認するが、全く判らなかった。

「しょうがない。道を引き返して――」

その言葉は続かなかった。咄嗟に飛んできた刃の様な物が、今まで持っていた地図を半分に切り裂いていたのだ。最初は植物系の魔物かと思っただが、ロイドの前には見知らぬ男が立っていた。

男の居る位置はロイドから十数メートル離れており、通常の剣では絶対に届かない間合いだ。しかし男の握っている剣の刀身は鞭のように撓っており、その長さも尋常ではない。更に、その刀身は引き戻されるようにして剣の形状になっていた。よく見てみると継接ぎのような剣で、エッジの効いた刃の禍々しさが印象的だった。

男の方は、年齢は対して高くは無いように見える。ロイドと同じかそれ以上かと言うくらいの、少しあどけなさが残った端正な顔立ちである。

咄嗟に身を退いたロイドは文句を言おうと口を開こうとしたが、向こうにいる男の言葉で遮られてしまった。

でもそれは、ロイドが思いもしなかった一言だった。

「ロイド・アーヴィング！　どうしてお前がここに居るんだ！」

ロイドに面識は無かった。しかし男の方は彼の事を憎々しげに睨んでいる。

「誰だよお前！？　いきなり変な武器で襲ってきやがって！」

「お前こそ！　わざわざ　神聖王国ヘイズル　から追って来たのか！？」

「神聖王国ヘイズル？ 何だよそれ！ つか話が噛み合っていないぞ！」

「お前に言われたくない！！」

仮に言うなら「剣状」となった武器を両手で握り直した男は、ロイドに向かって突き進んだ。

道に迷ったうえ、見知らぬ男に襲撃を受けたロイドは酷く困惑していた。やむを得ず剣を抜いたロイドは、男の剣を受け止めて言った。

「何だか知らないけど、俺はあんたの知ってるロイド・アーヴィングじゃないんだって！」

「ロイドじゃない？ 二刀流でツンツン頭で真つ赤な服着てる天然のロイドが他にいるもんかア！」

「ちよつと待て！ 落ち着けよ、な？」

ロイドの必死の説得が功を成して、男は渋々剣を納めた。戦闘の意思が殺がれてしまった男は、戸惑ったように辺りを見回す。

「……それにしてもここは何処なんだ？ 僕は確か宿のベッドで寝ていたはずなのに、起きてみればここで寝ていたんだ」

「もしかして、カイルたちみたいにとっか別の世界から飛ばされてきたのか？」

「カイル？ カイル・デユナミスか？」

「へ？ 知ってんの？」

「何度か剣を交えた事もある。もし仮に僕が自分の世界からこの世界に飛ばされたとしたら、原因は何だ？」

「うーん、心当たりが無いわけじゃないけど……」

「そうなんだ……ところで、さっきはいきなり仕掛けて悪かったよ。」

僕はアリーヤ・タリズマン」

「俺は……あッ、アリーヤは俺の事知ってるのか」

「一応知ってる……のか？」

「いや、俺に訊かれても困るんだけど」

無駄な会話を繰り返し、気付いた頃には既に日が暮れていた。

コンフェイト大森林 は昼間の神秘的な雰囲気から、何かが出てきそうな気味悪さを感じさせるものへと移り変わっていく。

話は後に、ロイドは一度 バンエルティア号 へ行くことを勧めた。無論、右も左も分からぬ状況で断る理由も無く、アリーヤ・タリズマンは複雑な心境のまま森の中を歩いて行った。

## 襲撃（後書き）

まだ続きます。

何か意見などがあれば、よければコメント下さい。

ありがとうございました。

## 散々な一日（前書き）

第二話です。

この季節は寒く、パソコン作業なのでキーボードを打つ指が悴んで動きません。

泣きごとを言ってもしょうがないので、頑張つてやりたいと思います。

## 散々な一日

何が起こったのか、アリーヤはバンエルティア号の食堂の床に倒れていた。確かなのは、舌を蹂躪する痺れだ。原因は恐らく、先ほど口にしたシチュー（の様なもの）だろうが、そこまで考える余裕は今の彼には無い。

緊急事態に周りが騒然としていたが、段々と意識が遠退いていく。貧血で何度か倒れたことはあるが、今回はそれ以上の危険すら感じさせるものだ。マズイことになった、味でも状態でも。

——さかのぼる事二時間前。

『転送実験の失敗』による異世界からの召喚と言うことで収まったアリーヤは、この船を拠点とするギルド？アドリビトム？に身を置くこととなった。彼と同じ境遇の人間は他にもいるらしく、そこそこの親近感芽生えたが、ダイランティアでも知った顔だと判ると、その感情も失せてしまっていた。

しかも空き部屋が無く、人数の少ない所で寝泊まりするという話になった時、アリーヤは何だかんだで理由をつけて、来客用の展望室を借りることになった。

荷解きの最中で夕食が出来たと呼ばれ、アドリビトムのメンバーとともに食事を摂ることになった。もちろん、知っている顔（あくまでもアリーヤの世界のだが）は居たので食欲はあまりなかった。だが、それはアリーヤだけに限らなかった。

全員が出された夕食を見て青ざめていた。その要因は無茶苦茶な

異臭を放つシチューと、今日の料理当番にある。

『ささつ、みんな食べた食べた〜！ おかわりもいっぱいあるからね〜！』

臭いだけなら、と勇んでシチューを啜ったアリーヤは、過去の例に漏れずその場で倒れていたのだ。

そして今、彼は死の淵を歩いている気分を存分に味わっている。大騒ぎの食堂の中心で虚ろに目を開くが、とにかく何が何だか分からない。気分も状況も非常に力オスだ。

「お、おい！ 大丈夫か！？」

ロイドがアリーヤの身体を揺するが、当然のように反応が無い。命の危機には何度か遭って、食事でも半ば殺されかけたロイドは同情にも似た思いを抱いている。

「死んでる！？」

「いや、まだ息はある。早く医務室に連れてかないと！」

肩を担いでアリーヤを立たせたロイドは、アリーヤの脚を引き摺りながら食堂を出て行った。

予想通りの展開に、本日の夕食はお開きとなる。話によると、料理当番はアーチェ・クラインとリフィル・セイジだったそうだ。

治療用のベッドから天井を仰ぎ見ていたアリーヤは、一瞬だが死を覚悟していた。今こうして意識があるのは、ある意味奇跡だとすら思えた。

恒例の『食中毒』だと言うが、あの清潔さが漂う空間でどうしたらあなるのか。やり場のない憤りを覚えた彼は、とにかくムスツとしていた。

「もう大丈夫だと思いますが、薬を出しておきますね」

この医療室を任されているアニー・バースから錠剤を受け取って、アリーヤは展望室へと向かった。比較的状态は良くなったが、若干足下が覚束ない。

「はあ……しんどい……」

壁に背中を預けて、私物の整理を再開した。リーダーのアンジュ・セレーナからお小遣い程度の軍資金を受け取っていたので、買い出しがあれば連れて行ってもらおうと考えていたりする。

アリーヤの置かれている状況はあまり好ましいとは言えなかったが、ダイランティアの逃亡生活に比べればマシである。来て早々絶対安静の事態に陥ったことは一度忘れ、気を取り直そうと頭を横に振った。

ふと目に留まった紙の筒を拾い上げる。この紙切れこそが、アリーヤがダイランティアで追われる理由となった原因である。こんな物は焼いてしまおうと何度も思ったが、彼にはそれが出来なかったのだ。

深いため息を吐きながら目の前を見ると、そこにはリンゴやブドウ、バナナと言った果物を抱えている、言わずと知れたロイド・アーヴィングとカイル・デユナミス、シング・メテオライトだった。

「ど、どうしたの？ そんなにここにこして」

「いや、俺たちまだ死にたくないからさ、コーダに頼んで貰って来たんだ。一緒に食うか？」

「僕はいいよ……今は何も食べたくない」

「まあ、無理もないか。おっと、そういえば紹介がまだだったな」

「ご機嫌なロイドをアリーヤは制すと、淡々とした口調で言う。

「カイル・デユナミスとシング・メテオライトだろう？ 僕の世界では面識ある」

「へえ。ねえねえ！ 君の世界の僕たちってどんなカンジなの？」

「対して変わらないよ。頭の悪いお人好しっていうふうに解釈してるよ」

「それ褒めてるのか？ 貶してるのか？」

「両方……ところでどうしてここに来たの？」

「俺たち、いつもここでメシだったり作戦会議だったりするんだ。眺めもいいしな！」

言われてみれば、ここは展望室だ。常に一定の高度を航行しているので、天気さえよければ見晴らしがよいのは納得できる。

アリーヤも何とは無しに窓の外を眺めてみると、真下は殆どが海面で覆われている。月明かりを反射しているので、小さな島々が黒い点に見えた。灰色の雲がより一層、幻想的な夜を醸し出していた。

果物の甘い香りが鼻腔をついた。すでに夕食を開催していた三人は、ありったけの果物に齧りついている。

ダイランティアでは敵同士だった者たちが、今はこうして一つ屋根の下で過ごしている。アリーヤとして微笑ましくもあり、変な感じだったのは言うまでもない。ただ、こうして気兼ねなく話せる相手がいるのはとても嬉しい事である。

「よっしゃ、満腹になったことだし、明日の作戦会議といくか！」  
「作戦会議？ 何の？」

「明日、オルタータ火山の方で大型の魔物の退治に行くんだけどさ。お前も行くか？」

「魔物退治……リハビリには丁度いいかな」  
「だろ？ 報酬は四等分になっちゃうけど」

それでもよければ、という話なのなら断る事も無いだろう。体調にも依るが、やはりこの世界のことをよく知る必要があると考えた。帰るのが数時間後か、何カ月後か、何年後か——もう帰れなくなるかも知れないと言っのなら。

「じゃあ、お願いしようかな」

どこか余所余所しく、アリーヤは告げたのだった。

それが自分の不甲斐無さからなのか、はたまた直感的な嫌な予感なのかは、本人でも知り得ない。

## 散々な一日（後書き）

以上です。

次話は例の三人組＋アリーヤVS魔物のお話を書きたいと思います。  
何か意見などがあれば、コメントいただけると幸いです。  
ありがとうございました。

## 不測の事態（前書き）

第三話です。

やっ和三話……っていう感じがします。

何となくアクセスした方でも、そうでない方でも、一度見てもらえたら幸いです。

とはいえ駄文でしかないので、そこら辺は勘弁して下さい。

## 不測の事態

ダイランティア の彼らも凄かったが、やはりそれは ルミナシア と言つ世界でも揺るぎない事実であつたようだ。

今朝早くから オルタータ火山 で魔物討伐の依頼を計画していたところで急遽組んでもらっていたアリーヤは、早速距離を空けて三人の様子を見ていたが、その戦いぶりには舌を巻くばかりである。

「ふう。どうだアリーヤ？ これが俺たちの力だぜ！」

同意して何度も頷き返す。

見計らつたように続々と小さい魔物が姿を現す。今度はアリーヤの番と言つて、三人は彼の援護に就く。

騎士団正式採用の長剣よりも、何倍の重量を有する蛇腹剣を鞘から抜くと、通常なら剣など届くはずがない距離から踏み込みと同時に振り下ろす。

アリーヤは至つて涼しい顔だが、その感情を代弁するかのようには蛇腹剣の刃は魔物に向けて飛ぶ。凶悪な鋸の様な刃は奇妙な軌道を描いて複数の魔物を抉った。

餌食となつた魔物たちは斃れ、拡散するマナとなつて空中に消えていった。

甲高い金属質の音を立て、蛇腹剣はアリーヤの持つ本体に吸い込まれるようにして元の形に戻る。

「おおー！ スゲー！！」

「ねえねえ、俺にも振らせてくれない！？」

昨日の食中毒から立ち直ったアリーヤの顔には、僅かに笑みが浮かんでいるが、それに気付かずシングは蛇腹剣の柄を握った。

「お……重いっ」

継接ぎの刀身の内部には、収縮性の高い特殊素材の繊維が張り巡らされている。その分、重量が肥大してしまった「欠陥品」として廃棄された物をアリーヤが手に入れ、独自の戦術理論に基づいて鍛錬してきたのがこの蛇腹剣である。

これを使いこなすには、相応の力量と技量が問われる。アリーヤは軽々と扱っているが、その裏には知られぬ努力があるのだ。

「僕の家系は戦闘民族みたいなモンだからね。血筋がどうこうってワケじゃないけど、そこそこ引き継がれてるのかも知れないよ」

謙遜の言葉を並べるが、彼らはそうは思わなかったらしい。

「何言ってるんだよ？ こんなスゲー剣を使いこなすなんて、相当な修業があつたと見た！」

「そつだよ！ こんなに重いのにぶんぶん振り回してんだもん！」

遠心力という単語が過つたが、多分理解してくれないだろうと考えてアリーヤは口には出さなかった。

その後も順調に進み、目標の魔物の住处とされている地点へと到

着した四人は辺りを見回すが、そこには大型の魔物なんていなかった。熱く煮え滾る溶岩だけが、ぼこぼこ音を上げている。

「おかしいなー？ 確かにここで間違いは無い筈なんだけど」

頭を掻きながらロイドは地図を睨んでいる。確かに、依頼の通りの場所に間違いは無いだろう。依頼主が目印に残したペイントもある。

「なあ、皆はどう思——」

ロイドの背後の溶岩が盛り上がった。滴り落ちる灼熱のマグマの下からは、熱にも耐え得る外殻に覆われた何かがそこにいる。

「うわぁ！？ いきなりかよ！」

自分たちの背丈三倍はありそうな魔物…… ラーヴァゴレムに驚きながら、ロイドたちは剣を引き抜いた。

しかし最悪な事に ラーヴァゴレム は一体ではなかった。四人を囲むように、合計三体の ラーヴァゴレム が立ちはだかっている。

「三人とも、用意はいい？」

三人が頷いたことを認めると、アリーヤは即座に術の詠唱を始めていた。その間、ロイドとカイルとシングは少ない足場を軽快に移動しながら、ラーヴァゴレム にちょっかいを出している。挑発しているのだ。

アリーヤには多少の補助術が使えることを、昨夜の展望室で確認していた。まずはアリーヤが戦力を底上げしたら、という戦法である。

術の詠唱中は身動きがとれない。基本的には後衛は前衛に守られながらサポートをするのが定石である。今回ののはそんなセオリーに基づいた戦い方だ。

「バリアー！」

アリーヤは物理的なダメージを軽減させる効果がある術を各個に展開し、自身も戦闘に加わった。

「こがねけん虎牙破斬！」

飛び上がったアリーヤは ラーヴァゴレム に空中で連続斬りを繰り出した。今は蛇腹剣を普通に切れ味の良いロングソードといった感覚で剣を振るう。

ラーヴァゴレム を構成する岩を粉碎しながらも、アリーヤはその攻撃を止めようとはしない。そして更なる連撃を叩き込んだ。

「こがれんざん虎牙連斬！」

しかしこれだけでは ラーヴァゴレム は倒せない。他の三人が二体を相手取っているのなら、アリーヤにすべきことは何か？ 焦る気持ち募るばかりだが、この最悪の状況下で取り乱してはマイナス効果だ。

（だったら――）

全力を以って相手に勝つ。それだけだと考えていた。

裂帛の気合いとともにアリーヤは刀身内部の繊維を伸ばし、ラーヴァゴレムの頭部に届くほどの長さまで蛇腹剣を撓らせた。

「崩壊<sup>ほうせんか</sup>華アアアッ！」

獲物を捉えた大蛇の如く、驚くほどしなやかな刀身はラーヴァゴレムに到達した。途端、ラーヴァゴレムの外殻はバターの様に分断されていく。

刀身が腹部まで切り裂くとアリーヤは器用に身を翻し、一旦戻した刃を今度は横に薙いだ。

「斬り裂けええッ!!」

額に脂汗を浮かべながら、軋む腕に力を込める。剣はゆっくりとラーヴァゴレムを上半身と下半身を分断していた。

刹那、アリーヤを達成感が満ちた。堪らなく嬉しかった。

そんな自分に鞭を打ち、今度はロイドたちが交戦しているラーヴァゴレムへと目を向けた。

一体はすでに沈黙して溶岩に浸かっている。残るもう一体もかなり動きが鈍くなっていた。

しかし、身体はアリーヤの加勢したいという気持ちに反対したように、何発か貰っていた攻撃の治癒に努めることにした。

「ナース」

呼ばれたように発生した小さく可愛らしい妖精が、四人の身体を柔らかな光が包む。

上位回復術を僅か数秒で詠唱を終えたアリーヤは、自分の持つ補助術でロイドらのサポートに就いていた。

剣術に優れた三人と、比較的何でもこなせることできるアリーヤは相性が良かった。

最後の一体を倒すのには、そう時間は掛からなかった。

「ハア……ハア……何とか、なったな」

体力的にも精神的にも限界が来ていた彼らは、暑さからくる目眩を必死に否定すると、お互いの拳をぶつけていた。

「いやあ、アリーヤがいて助かったよ。色んな事が出来るんだな」

あの回復以降、殆ど攻撃を受けなかった三人は見たところ外傷は無い。

アリーヤは術を行使しているうち、体内に秘めたマナを消費してしまった。休めば回復するだろうが、この倦怠感は暫く治まる気配

がしない。

無理矢理笑ったアリーの表情は優れない。しかし、それ以上に内心は嬉々としている。

ダイランティア では敵として、 ルミナシア ではこうして仲間のようにしている。

（きっと、向こうでもこんな風に笑えるのかな）

故郷に思いを馳せていると、三人がアリーの名を呼んだ。

「帰ろうぜ！」

アリーは先に歩きだしたロイドたちの背中を、ゆったりとして、けれども置いて行かれないように追った。

## 不測の事態（後書き）

戦闘はちよつと難しいです。

まあ自己満足＋勉強のつもりで書いてますんで、よければコメント下さい。

失うもの、得られるもの（前書き）

第五話です。

次回から別の章に入りたいと思います。

## 失うもの、得られるもの

アリーヤが ルミナシア に来てから一週間が経ち、バンエルテ  
イア号船内に彼がいる光景はごく自然なものとなっている。

いつも通り、一階ホールへと降りる途中の操舵室から外の景色を  
眺めていると、全体的に尖ったフォルムの体を持つ精神融合体、ニ  
アタが彼に尋ねた。

「君の世界、 ダイランティア について訊きたいのだが、いいか  
な？」

寝癖を指で弄びながらアリーヤ小さく顎を引いた。その目はまだ  
薄らとまどろんでいる。

「——僕の世界は昔、マナに満ちた世界だった。根源エネルギーを  
土台に発展してきた人類の止まる事の無い欲望は、世界樹が三年に  
一度つけるマナの塊、？大いなる実り？だけでは満たされなくなっ  
てしまった。やがて戦史を迎えた人類はその一つだけの実りを争っ  
た。一部が繁栄し、多くが貧しく暮らす影では、多くの国が滅び、  
多くの血と涙が流された。まあ、こんなところ」

人間たちの愚かさに苦笑いを浮かべながら、アリーヤはニアタを  
伺う。もちろん、何を考えているかは想像もつかないが。

「君は ダイランティア に居るこの者に追われていたと聞いた。  
それは何故なのか、訊いてもいいかい？」

最初は躊躇ったものの、アリーヤは一つ息を吐く。ニアタは了解

したと見て、それまでは何も言いださない。

「じゃあ、聞いてもらおうかな。ちょっと展望室まで来て貰える？」  
「解った」

ニアタはふわふわと浮き、アリーの肩の傍を着いていく。

朝が来たばかりの展望室は何時にも況して明るい。顔を顰めながらアリーヤは中央のカウンター席に腰を落ちつけると、しみじみと話し始めた。

「僕の家系は代々、世界樹を守護する番人として仕えてきた。でも、？大いなる実り？を狙う連中との戦いの中で疲弊していったね、父も母も、目の前で斃れたよ」

「……君も戦っていたのか？」  
「もちろん。アレはその時に受け継いだ物なんだ」

顎でしゃくった先には、鞘に収まった蛇腹剣が立て掛けてあった。そんな状態でもその形状は凶悪である。

「趣味悪いだろ？ アレは僕たち？タリズマン？の一族に伝わる伝家の宝剣なんだ。何処で、何時作られたのかも判らない。以前あの剣の構造を調べたいって変わった人がいてね。それで判ったのは、あの剣は相手に苦痛を与え、肉を斬り裂く為の剣なんだって……正直悲しくなったけど」

「なるほど、それで鋸の様な刃が連なっているのか」  
「まあ。その際に僕も怪我してね、もう五年が経つけど、たまーに痛むんだよねえ」

腹部を摩ながら嘯いた。

「これが原因で、暫く動けなくなった。その後は、国家間で協定が結ばれて、？大いなる実り？は競技で勝ち取ることになったんだよ。その世界樹を護っているのは、腕利きの猛者だって話だけど」

「君は、その代表として世界樹を護ろうとはしなかったのか？」

「い、痛いところ突くんだね。そう思ったけど、怪我とあの剣を使いこなすまでに時間が掛かり過ぎた。もうどの道行っても世界樹の番人にはなれないって解った時には、世界樹の為に出来ることをしようと考えたんだよねっと……」

立ち上がると、荷物から取り出した紙の筒をニアタの前に広げた。何かの設計書に見える。

「これは世界樹からマナを搾取するための装置か何かの設計プラン。国家協働の研究所から盗って来たんだ。事前の調査で、この機械が世界樹に及ぼす負担はかなり大きくてさ。それで、あの剣を調べたって言う人に見せて数字に出してもらったんだ」

「数字？」

「そう。世界樹の寿命のね」

途端、深刻そうな表情でアリーヤは、

「そしたら、この機械を使っても使わなくても、もう世界樹は、  
ダイランティアは――」

食堂は朝食時間を終え、クレア・ベネットとスタン・エルロンの

実妹リリース、種族不明のロックス（本名はロックスプリングス）は後片付けを始めようとしていた。

「すみません、まだご飯ありますか……？」

扉から顔を覗かせたアリーヤは、ぺこぺこ頭を下げていた。

「そういえば……アリーヤさんは来てませんでしたね」

「でも殆ど無くなっちゃったし……」

「でしたら、少々お時間をいただけますか？」

にこやかにロックスが言うので、素直に待つことにした。

そして出てきたのは、和風のソースを絡めたローストビーフとオニオンスライスのサンドイッチだった。

「こ、これは……いただきます」

美味しそうな予感に駆られ、サンドイッチに齧りついたアリーヤは感嘆を洩らした。

「昨夜のサーロインステーキのお肉が残っていたので、試しにローストビーフにしてみました。お味はいかがですか？」

視界が歪んだりばやけたりしていることに気がついたアリーヤは、悟られぬように顔を伏せたまま食事を摂り続けた。テーブルマナーには口煩いロックスも、彼の意を汲んで何も言わなかった。

幸せな時間。

このささやかな時間を大切にしてゆこうと、改めてアリーヤは思っていた。

失うもの、得られるもの（後書き）

以上です。

何かアドバイスとかがあれば、コメント下さい。

## 秘めたる想い（前書き）

どうも、なんだかんだで6話目来ました。  
ちよっと短いですが、駄文でよければ楽しんで行って下さい。

## 秘めたる想い

僕が ルミナシア と言う異世界に来てから一ヶ月が経った。

この世界の世界樹は新緑と乳白の色がとても綺麗だ。話によると、ルミナシア に存在するもう一つの世界の世界樹と一緒にあったからだそうだ。もし、ダイランティア も同じようになれるのなら――

でも、それについては考えることを止めた。あまりにも他人任せで身勝手な、しかもこの世界を破滅へと導く結果にもなりかねないからだ。

創造によつて紡がれていくこの世界と、先が見えてしまった元の世界。戻りたいかと言われれば、素直に頷くことは出来ないのかもしれない。僕は故郷の世界樹を護る為に存在する種族の生き残り。けれど、この世界で得たものを捨て去ることも出来ない。

ダイランティア で僕を追いかけていたロイドたちの様な国家の代表には、僕の事を知る人はいない。知ろうともしない。知らせようともしないのだから、当然なのだけれど。

しかし、この ルミナシア では嫌というほど首を突っ込んでくる。だけど、何も話せない。僕の事を知るのは、恐らく他の世界に精通したニアタだけだ。

世界樹を護ろうとしてしてきたことは、全て無駄に終わってしまった。

もし、ルミナシアの様に創造を行えるのなら……僕は自分の命を厭わない。ダイランティアという世界が存続し、そこに住む民が滅亡するとしたら、果たして僕はどんな選択をするのか？

分かりもしない事を分かつとするのはとても苦しかった。

だが、そう長く無いダイランティアを想うと、そうは言っていられないのが実情だ。

何れも選ばなければならない。血を貶めて世界を滅ぼすか、血に従って民を滅ぼすか。

僕には時間がない。

最早、別の道を詮索することなんて余裕は無かったのだから。

## 秘めたる想い（後書き）

以上です。

今回はここから新章と明記しましたが、予定変更で次回にします。  
何かコメントなどがあれば、よろしくお願いします。

## アドリビトゥム（前書き）

7話です。

すいません、ここから新章に入ります。

## アドリビトム

買い出しと依頼の発注を取りに、バンエルティア号はお馴染みの街の外れに停泊していた。各々が仕事や息抜きに遊びに向かったりと、自由な時間を過ごしている。

アリーヤはというと、リーダーであるアンジュ・セレーナの事務処理に精を出していた。

「ごめんね、どうしても片付かなくて」

そう言う彼女の言葉には、謝罪の色など感じられない。社交辞令同然の言動にアリーヤは、

「いいえ、どうせ暇でしたから」

語尾を強めて反撃したアリーヤとアンジュの間に、ぴりぴりとした空気が流れ始める。異世界からの転送事故者と、腹黒聖職者による無言の争いだ。

（今日はユーリさんと一緒に絶品スイーツ食べに行く約束だったのに、この人は）

（ふふ……半分居候の身でダイエット中の私を差し置いて美味しい物食べようなんて許さないんだから）

してやったと微笑むアンジュに齒噛みするアリーヤだが、諦めて仕事に戻った。

「アンジュ様！先ほど焼き上がったチーズケーキはいかがです

か？」

愛らしい姿でぱたと飛んできたのは、アドリビトムのコンシエルジュであるロックスだ。噂で聞いた話だと、この珍妙な生物はぼつちやり系の女子が好みらしい。ましてやダイエット中の女性からしてみればこれ以上の天敵はいない。

「え……あ……いや……」「ロックスさん、僕にも一ついただけませんか？」

「はい、まだまだいっぱいあるので遠慮なくどうぞ。アンジュ様は幾つ召し上がりますか？」

食べるか食べないかの質問を飛ばし、ロックスは数を訪ねていた。

これにはアリーヤも失笑し、ちらちらとアンジュを見ては声に出さず大笑いしていた。

「じゃ、じゃあ一つだけ……」

負けを認めたアンジュは、悔しそうにアリーヤを睨む。しかし、ロックスが渡したチーズケーキはアリーヤが要求した「一つ」とは大きさが違っていた。彼の三倍はある量だ。

「ハイ、どうぞ。まだまだおかわりはありますので。他に欲しい物はありませんか？」

笑撃に腹筋が崩壊しかけたアリーヤは突然、笑いを呻きに変えた。

異常を感じたアンジュとロックスが慌てて駆け寄る。

「ど、どうかされましたか!？」

「いやっ……大丈夫、大丈夫だから」

額に脂汗を浮かべながら、しかし先ほどから笑っていたせいか頬が緩んでいるのか引き攣っているのか判らない。

「ちよつと昔に負った古傷が……痛むだけだからさ」

それでも彼は笑顔を取り繕っていることをアンジュは直感的に解っていた。ロックスも見た目に似合わず鋭く察した。

「病気とかじゃないんですよ？ ホントに……傷が痛むだけだから」

激痛が落ち着いたアリーヤは、脂汗を拭くとフォークを手にとった。

「いただきます。……やっぱりロックスさんは凄いなあ。こんなに美味しいの作れるんだから」

何事も無かった様に振舞うアリーヤを、本気で心配そうな目でアンジュは見据える。そこにいつもの腹黒さは感じられない。

「本当に大丈夫なの？」

「気に、しないで下さい。ちよつと外に出ます……」

食欲を無くしたように残りをロックスに渡すと、アリーヤはふらふらと甲板に向かった。

そんな背中を見てアンジュとロックスは顔を見合わせる。

「ねえ、ロックス」

アンジュは出来たてのチーズケーキに視線を落としながら嘯く。

「ハロルドによろしく言っておいて。費用ならこつちで負担するから――」

エミル・キャスタニエとリヒター・アーベントは酒場のカウンタ―で依頼リストをまとめている。

師と弟子の様な関係の二人だが、リヒターはエミルにはある思い入れがあるらしい。常に気にかけている節がある。

（やはり似ているな……いや、だが、本人の筈は……）

もともと取りつき難しい性格のリヒターを慕うエミルにとって、彼は気難しくはあるが本当は優しい人物だと解釈している。それを聞いた時のリヒターは至って居心地の悪そうな表情を浮かべていた。

「リヒターさん？」

呼ばれている事に気が付かないリヒターの肩に触れようとした時、エミルの背中に大柄の男が激突した。「うわっ!？」

それに気付いたリヒターが振り返ると、後ろでは乱闘が起きていた。発端は、ならず者同士の鉢合わせが関の山だろう。

事態の鎮静化に乗り出そうと、リヒターは席を立つ。

「お前たちは何を——」「おい、他人にぶつかっておきながら詫び一つも無エのかよ？」

気弱で、しかしながら優しさを宿していたエミルの緑色の瞳は、何時になく燃え盛っている。その瞳に宿っているのは凶悪なまでの力強さと、全てを萎縮させる凶暴さだった。

「いい度胸だ。一人残らずぶん殴ってやつから来いよっ！」

狂喜に歪んだ笑みを零しながら、エミルは暴漢たちに突っ込んで（来いよと言った割には）一方的な私刑を開始しようとしていた。

頭痛に悩まされるリヒターは彼を止めるべく、力強く床を踏みだした。

そこで湧きだす綺麗な淡水と魔物の力二肉を求め、チエスター・パークライトとリッド・ハーシエルは シフノ湧泉洞 に赴いていた。

食料庫の材料が乏しくなってきたので、今日は食材を含めた買い出しだった。しかしこの二人は狩人という性質柄、調達する食材の方が安上がりだし狩りを楽しめる方が良いのでここに来ているのだ。

「今日も大量だな」

機嫌が良さそうに鼻を鳴らすチェスターは、シフノ湧泉洞に生息する魔物 クラブス を縄で繋いで引き摺っていた。リッドも同様で、台車に積んだ湧水を横目で見ながら言う。

「うまいカニにうまい水！ これ以上の贅沢は無いぜ〜」

「あとはちゃんとした料理が出来る人だよな。とりあえずアーチェとかリフィルさんとかには厨房には立ってほしくないな……」

「同感だ」

例の食中毒事件を経験した人数は少なからず多い。各国の主要人物が多かったが、彼らには幸い被害は無かった（逆にその主要人物によって齎された食中毒もある）。

他愛の無い話に華を咲かせながら、二人はひんやりと冷たい洞窟内を歩いていった。

「はい、分かりました」

カノン・グラスバレーはメモ帳片手に依頼の内容を書き込んでいた。場所、目的、報酬。大切な部分はしっかりとチェックした。

「お仕事ですね？ はい、はい」

爽やかな笑顔で対応するのはコレット・ブルーネルだ。ロイドと

は幼馴染で、最近は「いい仲」になっている。バカと超天然ボケの響き合いはなかなか合っているものだ。

一方で、ユーリ・ローウェルはサボって人気スイーツ店に行ってしまう、アリーヤはアンジュに捕まって身動きが取れないらしい。

「ユーリさんって大人の割には、ロイドみたいなことするよね」コレットがそう言った。

勿論、その言葉に悪気は無い。

だが、それを後ろで聞いていた長髪の青年……ユーリは片眉をピクピクと動かしながらよく分からない笑みを浮かべていた。

「へえ、折角差し入れ持ってきてやったんだけどな。んじやいいわ俺が食うから」

「え？ あ、ごめんなさい。私そんなつもりじゃ……」

うるたえるコレットに絶品と評判の？ブウサギケーキ？が詰められた箱を突きつけられた。

「ほらやるよ。ただし、仕事は任せたぜ」

「はい！」

そんなやりとりをしながらユーリは空を仰ぎ見る。

「今日もいい天気だな。お陽さんが眩しいぜ」

陽光が遮られる程度に腕を翳した。

——しかし、この時はまだ誰も知らなかった。悪意は静かに忍び寄っているというのを。

## アドリビトム（後書き）

以上です。

既存キャラはそのまま書くのが難しかったりしますが、以外と楽しいです。

その点の御指摘などがあれば、コメント下さい。

## 悪魔の誘い（前書き）

第8話です。

思ってみたら、自分でもここまで続くとは思いませんでした。 新章  
にしておいてアレですが……

駄文でよければ、楽しんで行って下さい。

## 悪魔の誘い

甲板で涼んでいたアリーヤは街を眺めながら浅い溜息をつく。腹部に当てていた手を離し、手すりに頼杖を突きながら、ぼんやりと辺りを見回す。

「……………」

先ほどの振る舞いはいかなるものなのか、いつまであおしていられるのかは判らない。けれど、決して突き通せるほどの嘘ではないのだ。

アリーヤが「古傷」と謳っている傷は、ルミナシアに飛ばされる少し前に、ダイランティアの騎士国家、フレスヴェルグの二大騎士団長の一人、リオン・マグナスに負わされたものだった。

だがアリーヤは憎悪も憤怒も感じない。あくまでも悪人はアリーヤであって彼ではなく、命令に忠実に従うのは国家の騎士としては評価すべき点だ。彼は悪く無い。

ただ直向きに世界樹の為にと悪事に手を染めてきた。殺すということとはしなかったが、それよりも苦しい現実を相手に強いことは頻繁にあった。自分の武器がその様に設計されているのだから割り切るしか出来ない。言い方を変えれば開き直っているだけだが。

しかし、アリーヤは自分のしてきた事に後悔は無い。やり直す機会があるならきつと同じ道を選ぶだろう。

（頑固なだけだね）

苦痛めいた笑いを小さく浮かべる。

「アリーヤ君！」

アリーヤを呼んだのはアンジュだ。彼女は慌ただしい様子で伝える。

「あなたにお客さんが来てるの！」

「へ、お客さん？」

この世界に知り合いなどがいるはずがない。ましてやアドリビトム以外の人間と会話をしたことなど無いのだ。

疑問がしこりと残るが、その人物を無下にも出来ない。

一階ホールに戻ったアリーヤを待っていたのは、目を見張るほどの美人だった。黒々とした服装は清潔感が漂い、清楚な雰囲気的女性はアリーヤを見据えた。

「あなたがアリーヤ様ですね？」

「え、あつハイ」

「私はウリズン帝国所属、ウロボロス騎士団から参りました。スルーズとお呼び下さい」

深く頭を下げたスルーズという女性に、アンジュは眉を顰めた。

ウリズン帝国は以前から星晶ホスチアと言うマナを発する鉱物の採掘を民に強いてきた大国の一つだ。芳しいものではない噂も時折耳にしていた。このウロボロス騎士団という存在にも覚えがあるが、ここで

は思い出せない。

「今日は別に争おうとしに来たわけではありません。アリーヤ様を我が騎士団にお誘いに来ただけのことです。噂は常々伺っております、私は騎士団長の命によってこれをお持ちしました」

スルーズは一枚の紙を取り出すと、それをアリーヤに手渡す。

「契約書、ですか」

「はい。既にアリーヤ様をお迎えする準備は整っております」

アンジュも我慢ならないと言わんばかりにスルーズに視線を浴びせたが、スルーズ本人は至って平然としている。

「ちょ、ちょっと待って。アリーヤ君は――」「アリーヤ様はアドリビトムのメンバーでは無い筈です。選択権はアナタではなく、アリーヤ様にあると思われますが」

たじろぐアンジュを余所に、アリーヤは契約書に目を通していた。

「いかがでしょうか？」

期待の籠っていて、しかし危険の孕んだ声でスルーズは尋ねた。

そしてアリーヤは、納得したように頷くと契約書をグシャグシャに丸めてしまった。

「すみません、僕はあなた達の所には……いけません」

予想通り、と言わんばかりに微笑みを浮かべたスルーズはアリー

ヤを見た。

「そうですね、残念です。では、お氣が変わったらご連絡ください  
——」

そう言い残すと、スルーズは背中を向けた。不敵な笑みも残して。

「アリーヤ君……」

「さて、僕も大分良くなったんでちょっと街に出ます。仕事のお手  
伝いはそのあとでやりますから」

決意を固めたアリーヤは清々しい顔でホールを出て行った。

ウリズン帝国首都、ウロボロス騎士団本寮へと帰還したスルーズ  
は真っ先に団長室の扉を叩いていた。

「よろしいでしょうか？」

「おう、入れや」

ドスの効いた声が帰ってくると、スルーズは扉を静かに開いた。

彼女の目の前のデスクに足を乗せているのは、ウロボロス騎士団  
を育て上げた伝説の騎士、エルンスト・ハリファックスその人であ  
る。

そんなエルンストはスルーズに尋ねる。

「どうだった？ 勧誘は」

「団長の先見通り、断られてしまいました」

「だろうな。あーあ、面白い武器で面白い戦い方するっていうから誘ったんだけど……まあいいや、これからもっーと愉しくなるんだからさ」

煙管を吹かすエルンストは、壁に掛かったウロボロス騎士団の紋章を見つめた。

不死の象徴である、自分の尾を咥える蛇をモチーフにしたマーク。

ニヤけ面が張り付いた顔でエルンストはスルーズを見直した。

「自由のギルド、アドリビトムか。教えてやんなきゃな」

少しの間を置いて、

「それが良かれ悪かれ、自由ってのは、秩序の檻の中に在るもんだ。檻からで出ちまえば、それは単なる横暴にしかないってことをな」

柱時計の音だけが部屋に響いていた。

## 悪魔の誘い（後書き）

以上です。

御指摘あればコメントよろしく願います。

## 器用貧乏の努力（前書き）

第9話です。

まあ、こちら辺はいつも通りということので省略させていただきます。  
駄文ですが楽しんでいって下さい。

## 器用貧乏の努力

アリーヤは規格外の攻撃力と重量を誇る長剣、？蛇腹剣？なる物を扱っている。

しかしその重さとして、使える剣技は多くない。脚を使った格闘技で補っていると言ったところだ。

彼は基本的に、格闘技を絡めた戦闘スタイルを取っている。この？蛇腹剣？最大の魅力である中距離攻撃が疎かになることの方が多い。本人としても、これよりも軽い武器を使おうと何度も思ったが、やはり先祖代々から伝わる家宝を易々と手放すことも出来なかった。

問題は武器だけではない。彼が使える治癒術や補助術も考える必要があった。

回復術については、複数を同時に回復することの出来る ナースだけ。補助術は、味方の物理防御を上げる バリアー、術防御を上げる レジスト だ。

？死霊使い？ネクロマンサーのジェイド・カーティス曰く、「器用貧乏なんですネ

」

この時はあまり相手にしてもらえなかったが後々訊いてみると、アリーヤはパーティ内での戦闘で活躍できる人材と返って来た。

個人戦闘でも経験豊富だったアリーヤとしては、格闘技から剣技へと持ち込めば済む。一人で使うには燃費が悪いが治癒術で回復出来るし、事前に戦闘があると知れば先に補助術をかければよいだけ

の話だ。

ルミナシア に来てからはパーティ戦闘をする機会が出来たので、ダイランティア での戦い方に修正を加える必要があると考えていたアリーヤは、ロイドやカイルやシングの他に、クレス・アルベインやレイヴン、リフィル・セイジ、その弟のジーニアスを誘って模擬戦闘をすることにした。

彼らが来ているのは カダイフ砂漠 だ。足場が悪く強すぎる日差しが体力を奪う劣悪な環境だ。

「すみません、今日は僕の我が儘に付き合わせてしまって」

「いいのよ。勉強熱心な生徒は歓迎すべきだわ。ロイドたちもアリーヤを見習ってほしいわね」

「せ、先生……」

一同の笑いが辺りに響く。

演習場所に到着した彼らは言う前に自分の獲物を手に取っていた。

「じゃあ、今回は僕とロイドとカイルとシング。他の人はそっちパーティを組むって事で」

全員が頷いた事を認める。

「それじゃあ、手加減抜きで行きますよっ!」

それを合図に前衛職が駆け出し、後衛が術の詠唱を始めている。

アリーヤも無意味に彼らに頼んだわけではない。クレスはアドリ

ビトムでも一、二位を争うほどの剣の腕を持っているし、リフィルやセイジは魔術師としては一流だ。残るレイヴンは胡散臭いが、短剣が弓に可変したり弓が短剣に可変したりする奇妙な武器を使っている。

ある意味？蛇腹剣？とは似たようなものだが、実は違ったりもする。それを説明するのはアリーヤにも難しかったが、何となくレイヴンの戦い方が参考になると考えていた。

「レジスト！」

術防御を高めておけば生存率はぐっと上がる。何が起こるか分からない戦場に於いて、無駄にならない程度に出来ることはしておく方が良い。

クレスはカイルとシングを相手取っているが、それでもほぼ互角の戦いをしている。一方ロイドは、リフィルとジーニアスに標的を定めているが、それをレイヴンは弓による遠隔射撃で妨害をしている。

「術士中心なのにバランスがいいなあ」

改めて感心すると、カイルたちを切り抜けてクレスがアリーヤに迫っていた、が。

「アリーヤ！ クレスが……ってアレ？」

消えた？ そう思ったアリーヤにだけ影が出来た。

「転移蒼破斬！！」  
てんいそうはせん

？時空剣士？の異名をとるクレスは、瞬間的な移動でアリーの頭上に迫っていた。

しかしアリーヤは顔色一つ変えず、？蛇腹剣？を砂に突き刺した。バランスを保ちながら、渾身の膝蹴りから猛る肉食獣の気を放った。

「獅子天吼弾ししてんこうだん！！」

両者が衝突する。

宙に跳ね返ったクレスは着地した。見たところ、大したダメージは追っていないが、それはアリーヤも同じ事だ。

「猛蛇流碎衝まげりゅうさいしゅ！！」

？蛇腹剣？を担ぎ、大きく一步踏み込んだ。

振り下ろされ？蛇腹剣？の刀身は一直線にクレスへと奔った。

不意を突かれ、防御姿勢に入ったクレスは強烈な一撃を受け止めて砂地を滑った。

「ぐっ！」

カイルとシングに目で会話を済ませ、アリーヤは後衛陣に向けて走る。

後を追おうとしたクレスを二人が妨害した為、彼は難なくロイドの隣に立った。

「どうつ？」

「ダメだ！ レイヴンって普段はアレだけど、戦うと強い！」

「喋っている暇があつて！？」 「グランドダッシャー！！！」

力強くジーニアスが叫ぶと、砂を掻き分けて岩が次々と盛り上がる。波を連想させる岩から逃れる為、二人は砂地を蹴って飛んだ。

「させないよオ！」

矢がアリーの耳を掠める。他にも二、三飛んできたが、それはロイドが切り落としていた。

（届くか？）

見積もってもギリギリ伸ばして届くかどうかの位置にレイヴンは居た。

アリーは以前、ラーヴァゴレム に使用した空中での十文字回転切りを検討したが、一旦着地してから体勢を持ち直すことにした。

「ロイドはリフィルさんたちを！」

アリーは目もくれずに告げ、レイヴンを見据えた。

飛び上がって斬撃や蹴りを繰り出すが、レイヴンは全て紙一重で避け切った。

「そんな物騒なので攻撃されたオジサン、あっというまに終わっち

やうでしょ？」

「……ッ！」

短剣に切り替わった武装で斬りつけられ、怯んだアリーヤは頃合いだと治癒術の詠唱を始めた。

その間の隙だらけな彼をレイヴンが見逃すはずもない。距離を開けて弓で仕掛けた。

が、ここでアリーヤが凄技を見せる。

「嘘お！？」

矢を全て空いた左手で取ったアリーヤは、丁度術の詠唱を終えた。

「ナース！」

クレスの攻撃を受けたカイルやシング、リフィルやジーニアス、レイヴンの猛攻を受けたロイドの体を召喚した白衣の妖精たちが癒す。

「まだまだこれから！！」

アリーヤはそう言い放つと、受け取った矢を押し折って放り投げた。

辺りは夕暮れで染まっている。

パーティでの模擬戦を終えたアリーヤたちは帰路に着き、疲れていたがどこか「楽しかった」みたいな表情で談笑していた。

「いやあ、アリーヤって強いんだね！ ロイド、もしかして負けちゃうんじゃない？」

「そ、そんなことないさ！ カイルとシングがいれば大丈夫！」

「えっ！？ 一対三で戦うの！？ それは卑怯だよー」

「どちらにしても、遊び感覚でしていたら本当に強くはなれないわ」

「リフィルさんの言う通りだよ。僕もアリーヤとレイヴンさんの戦いをちらちら見てたけど、二人とも面白い戦いをするんだ」

「ま、武器が面白いからねオジサンは」

「ていうか、クレス強すぎだよ！」

「ははっ、僕なんてまだまださ」

「アリーヤもだけど、クレスもカッコいいなあ！」

シングは目を輝かせて言う。クレスもはにかみながら頬を掻いていた。

「でも、今日は勉強になりました。皆、ありがとう」

ふとアリーヤは思い出したように自分の腰を手で探る。

「あ、ポーチ落としちゃった。ちょっと取ってきます」

それを聞いたクレスは自分の手を叩き突然、

「え？ アリーヤ忘れ物したの？ ありやりや」

一同に極寒の嵐が来たのは言うまでも無かった。

絶句したアリーヤは急いで元来た道を走った。

彼が見えなくなった頃、ジーニアスが気付いた。

「あれ？ レイヴンは？」

その行方を知る者はいなかった。

## 器用貧乏の努力（後書き）

以上です。

こうして書いてみて分かったんですけど、自分はロイドが好きらしいです（笑）

何か意見があれば、コメントよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1414z/>

---

Tales Of The World Radiant Mythology -剣戟のアリーヤ-

2011年12月18日12時49分発行